

## [報告]

## JICA近畿大学連携ボランティア事業

—ペルー共和国野球振興支援ボランティアに参加して—

近畿大学産業理工学部経営ビジネス学科

近畿大学産業理工学部 経営ビジネス学科

宮崎 正智 内村 昭仁 中石 康貴

渡邊 翔也 貫 亮介 田上 啓一郎

湯川 貴生 大森 貴昭

派遣期間 2016.2.12～3.9

訪問先 ペルー共和国

## 1. はじめに

JICAは、日本の政府開発援助(ODA)を一次元的に行う実施機関として、開発途上国への国際的な支援を行っている。「すべての人が恩恵を受けるダイナミックな開発」というビジョンを受け、多様な援助手法のうち最適な手法を用い、地域別、国別アプローチと課題別アプローチを組み合わせ、開発途上国が抱える課題解決を支援していくことを掲げている。そのJICAを通じて、短期ボランティアの野球隊員としてペルーへと派遣されることとなった。

ペルーでは、南米という土地柄もあり、最も人気のあるスポーツはサッカーとされている。一方、野球は日系人の間では比較的人気のあるスポーツだが、ペルー全体には浸透しておらず、野球人口はわずか1000人程度とされている。また、ペルー国内で野球道具を購入できる店は無く、自国の野球道具のほとんどが寄付による道具や、アメリカで購入したものとされている。そのような環境であるが、私たちはペルーの子供達に野球の楽しさを伝えることを目的として現地に派遣されることとなった。

本稿ではペルーに派遣されたこと、日本の野球の文化との違いなど、現地に行っ

(宮崎 正智)

## 2. JICAの歴史

青年海外協力隊(JOCV: Japan Overseas Cooperation Volunteers)事業は、前述の協力隊発足の経緯のとおり、1965年(昭和40年)4月にわが国政府の事業として発足した。

事業の実施は当時の海外技術協力事業団に委託され、同事業団の中に日本青年海外協

力隊事務局が設置された。

その後、1974年(昭和49年)8月にわが国政府が行なう国際協力の実施機関として国際協力事業団(JICA: Japan International Cooperation Agency(現国際協力機構))が発足し、その重要な事業のひとつとして受け継がれ、名称も青年海外協力隊となり、今日に至っている。

## 2-1 JICAボランティアとは

JICAボランティア事業は日本政府のODA予算により、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施する事業である。開発途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣する。

その主な目的は、(1) 開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、(2) 友好親善・相互理解の深化、(3) 国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元です。なかでも、青年海外協力隊は事業発足から50年以上という長い歴史を持ち、これまでにのべ4万人を超える方々が参加している。

応募できるのは応募時に20～39歳(青年)、40歳～69歳(シニア)の方で、日本国籍を持つ方である。募集期間は年2回(春・秋)、活動分野は農林水産、保健衛生、教育文化、スポーツ、計画・行政など多岐にわたる。自分の持っている知識、技術、経験などを生かせるのがJICAボランティアの特徴である。派遣期間は原則2年間であるが、1ヶ月から参加できる短期ボランティア制度もある。

## 2-2 JICAとペルー野球ボランティア

ペルー野球連盟は体育庁の管轄下で、ナショナルチームおよびコーチの育成・指導を行っている。また、リマ市にある4つのリーグ(合計23チーム)に対しても野球指導を行っている。リマ市での野球競技者は約1,000名。配属先の会長は日系人であり、野球の競技指導に加えて、野球少年たちへの日本的な礼節、躰といった精神面の鍛錬も期待されている。国内他州でも野球は行われているが、競技人口が少ないため、野球競技人口の拡大を目的とした普及活動も今後の課題としてあがっている。協力隊派遣再開後、現在まで2名の野球JVが活動しており、大学連携派遣として毎年10名程度の短期野球ボランティアを受け入れている。

(内村 昭仁)

### 3. 近畿大学の派遣に至るまでの動き

私たち、短期派遣隊員は、東京の千代田区にある竹橋研修施設で五日間の研修を行った。研修では、短期ボランティアの方や、語学訓練免除の長期ボランティアの約100名の方が研修に参加した。

講座内容は大きく分けて二つに分類される。一つが「健康管理・安全管理」でもうひとつが「社会的多様性理解・活用力」である。海外で生活する上で必要不可欠な内容を受講し最後にそれらのテストを受けてレポートを提出するということである。

講座内容の一部で「海外における安全対策」という部分で海外では色々な事件に巻き込まれることが多くここでは実際にどういった事件に巻き込まれているかということでも今までに海外に行ってきた事件のお話を聞き、その対処法としてどのような対策をすればよいか学んだ。その中で痛感したのが自分の身は自分で守ることが大事だと強く感じた。

他にも海外にはどういった感染症などがあるかや世界の宗教理解として世界にはどういった宗教や文化があるのかを学んだり体力維持講座として実際にNHKのラジオ体操を行っている長野信一氏を講師に招いて体を動かしたりする講座もあった。

さらに派遣国別に分かれてそれぞれの国に詳しい人を招き、質疑応答など派遣国の説明を行うという講座もあった。

五日間の講座を通して一番気になっていた安全管理のことや色々不安な事があったが、講座を通してたくさんの方の知識を身に着けたことにより現地では安全に楽しく活動する事ができた。

(中石 康貴)

### 4. ペルーの歴史

今回のJICA短期ボランティアで、私が派遣されることになっているペルー共和国の歴史、任国の事情について調べた。

まずは、ペルー共和国の歴史について述べる。現在のペルーに相当する地域は先コロンビア期のアメリカ大陸で最も高度な文明が発達した地域であったとされる。15世紀にはインカ帝国という当時の地球上最大級とも言われた国家が繁栄していた。1533年にインカ帝国はスペイン人の征服者、フランシスコ・ピサロによって滅ぼされた後、スペインの領土となったアンデス山脈一帯はペルー副王領として再編された。リマは南アメリカの西半分を統括した副王領の中心地となったが、植民地時代を通して現在のペルーに相当する地域は徐々に周辺地域と比べた衰退が明らかになっていった。1821

年に独立を宣言し、1824年に独立を達成したものの、その後も内政は安定せず、

1879年から1883年まで続いた太平洋戦争ではチリに敗北し、南部の領土を割譲した。20世紀に入ってからも内政は安定せず、経済的にも社会的にも低開発な状態に留まり、1968年の軍事クーデターによって成立したベラスコ將軍の軍事革命政権によって実施された一連の社会改革も、ペルー社会に肯定的な影響を及ぼすことはできなかった。1980年の民政移管後には深刻な社会不安と経済危機に見舞われ、左翼ゲリラと政府の間で内戦に陥っている。また、1941年からペルーはエクアドルとアマゾン川流域の低地を巡って数次に及ぶ国境紛争を繰り広げ、1998年に最終的にこの紛争に勝利して広大な領土を併合している。

次に任国事情について述べる。ペルー共和国の首都は「リマ」で、主に話されている言語はスペイン語である。面積は約129万平方キロメートルあり、日本の約3.4倍ある。人口は約3081万人である。また日系人の数が約十万人と非常に多く、ブラジル、アメリカに次ぐ世界第三位である。その他に世界遺産として「ナスカの地上絵」や「マチュ・ピチュ」などがある国である。

(渡邊 翔也)

### 5. ペルーでの活動

#### 1) COMAS球場

AELU、CALLAOなどの施設が充分に整っている場所で主に活動を行ってきたが、中心街から離れて過ごしている子供たちのために一度だけCOMAS球場を訪れた。COMASはリマの中心街から車で1時間程離れた場所にある。COMASに到着するとそこは球場と呼ぶのは難しいほど設備が整っていなかった。面積は100㎡ほどで一面雑草が生えていたり、大きな石が転がっていたりもして、子供たちがいつケガをしてもおかしくない状況であった。参加してくれた子供達はおかしくない状況であったが、初心者の子供も多くいた。7歳から17歳までであったが、初心者の子供も多くいた。しかし、初心者でも笑顔で白球を追いかける姿を見て私達も感じるものがあった。純粹に野球を楽しむ子供たちを見て、私達も野球に対する姿勢を改めて考えなおす良い機会となった。ペルーの子供たちは自ら進んで勉強しようという意志が強かった。休憩時間でも私



COMASの球場

たちに身体の動かし方、スイングの仕方などを聞いてきてくれた。これは日本の学生野球に欠けていることだと感じ、私たちが逆に教えられることも多かった。

(貫 亮介)

## 2) CALLAO (カヤオ)

今回、私達近畿大学生はJICAの短期ボランティアに参加し、ペルーで主に子供達の野球指導とペルー代表や現地のクラブチームとの試合を行った。私達は各球場や施設で指導や試合を行ったが、CALLAOは野球以外にもサッカーやバスケットボールなどの多くのスポーツが行う事のできるスポーツ施設である。

CALAO球場はペルーの中でも非常に充実したグラウンドであり、野球をする上では大きな問題はない場所である。練習試合ではあったが、今回ペルー代表との試合で勝利した球場がCALLAO球場である。野球指導では守備練習や打撃練習といった野球の基本的な指導を中心に行い、子供たちが飽きないように、練習メニューを工夫して指導を行った。前回と少し異なるのは体力測定を行った事である。目的は現在の体力を把握し、体力向上を目指す為である。初日と最終日に子供達の体力測定を行い、その成果を把握した。遠投や反復横跳び、立ち幅跳び等を行ったが、野球と同様子供達は思い切り良くボールを投げたり元気良く飛び跳ねたりと、元気良くやってもらえる事ができた。

体力測定の結果には、変わらない子もいれば大きく変わった子もいて少なからず私達の指導の結果は出てきたと思われる。来年以降の短期ボランティアでも体力測定を行って行けばペルーでの野球のレベル向上に繋がると思う。

(田上 啓一郎)

## 3) AELU

AELUとは日系人の方々が主に使用する総合運動施設である。施設内には野球場だけではなく、フットサル場、テニスコート、屋内外プール、陸上競技場などがあり、スポーツをするには万全の設備が整っている。また宿泊もすることができ、レストランや売店も複数あり、AELUの施設内だけでも充実した生活が送れると言える。施設内には日本語の看板や日本語を話せる方々が多かったので親近感が湧いた。



CALLO球場での様子

今回、私達はAELUのグラウンドでの活動は数回しかなくナイターでの試合が主なものだった。ペルーで夜に試合が出来るとは考えてもいなかった。またバックネット裏には観客席があり、試合には多くの方が観戦をしに来てくれていた。しかし、グラウンドはマウンドがなく、外野は凸凹でイレギュラーをすることが多くあり、内野の土も硬く日本のグラウンドと比べるとやはり日本のグラウンドの整備がゆきとどいていると感じた。

最後に、AELUのグラウンドや施設、そして私達をあたたく迎え入れてくれたAELUの関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

(湯川 貴生)

## 4) 試合の様子

今回、私達は子供たちに野球指導をするだけでなくペルーセレクトションチーム、クラブチームを相手に交流試合や大会に出場した。最初の大会の初戦はペルーへ到着して3日後だったので身体が動く心配であったが12対3と大差で勝利することができた。その大会では4勝1敗と勝ち越すことができ、日本のレベルの高さを見せることができた。

ペルーの選手の中にはレベルの高い選手もたくさんおり、これまでの日本の野球の普及活動の成果が出てきているものだと感じた。しかし、まだ日本ならではのマナーなどは伝わっていないと感じることもあった。グローブを投げる、攻守交代を歩いて行うなど、まだ伝え足りていないことも多くあった。試合では結果を求めただけでなく、攻守交代のダッシュや道具を大切に扱う事を私たちが見せることで学んで欲しいと思い、行動に移した。活動の後半には国際大会に出場した。その大会では2勝1敗。ほとんどの試合で苦戦することになった。相手の選手は技術がなくても身体能力が高い選手が多かったため楽に勝つことは難しかった。年を重ねるにつれて簡単に勝つことは難しくなってくるだろうと感じた。

(貫 亮介)

## 6. まとめ

私たちの行った主な活動は、ペルーの子供たちに野球の技術指導を行い、野球という

スポーツをペルーに普及させることと、現地の18〜35歳くらいで構成されたチームと試合をすることによって、ペルー野球のレベルの向上に努めることの二本柱であった。

実際、ペルーの子供たちに野球を教えて感じたことは、日本の子供と異なり、体の動かし方が器用ではないことや、現地に野球ショップがないことから使っている道具が不足していることなどを感じた。また、私たちが野球指導を行い、子供たちに教えることによつて指導する難しさを感じたり、野球を通して様々な異文化にも触れることができた。

さらに、大人のチームとは計10試合を行ったが、ペルーの方たちは体が大きくパワーのある選手が多いが、日本の選手のように技術や体を器用にこなす選手がすくないという印象をもった。しかし、選手一人一人のモチベーションは日本人に勝り、逆境をはね返す気持ち強いことを感じた。

今回、ペルーの野球に触れてみて、道具や設備が整っていない中で野球をやっている姿を見て、私たち日本人に足りない多くのものを内に秘めていることを感じた。この足りない部分を認識し、多くの人に伝えていくことで人間性の部分で成長をしていきたい。

私たちは、今回JICAとの連携プロジェクトを通して、短期派遣ボランティアという形でペルーに行く機会を頂き、多くのことを吸収することができた。

そこで一番感じたことでは、人のこころの温かさである。私たちがどこに行っても、現地の方に丁寧に案内をしていただき、こちらの要望を何か策を練って叶えようとしてくれる場面が多くあった。その点、日本人は相手の気持ちを考え過ぎて、控えめになることがあると思う。

そして、ペルーの人々はとてもフレンドリーであった。ペルーは日本と異なり、挨拶から心をオープンに接する。一方、日本人は初めの挨拶ではあまり心を開かない人も多



セレクションチームとの試合



セレクションチームとの試合後

(大森 貴昭)

くいる。そこが、人と人との壁になつていのではないかと私は感じた。最後に、私たちはこの活動を行えたのは日本やペルーのJICA関係者、近畿大学産業理工学部事務の方や多くの先生方のご協力があったからだ。ペルーでの経験を是非、色々な人にアウトプットして広めていきたい。

(大森 貴昭)

#### 引用文献

- JICAボランティアの歩み JICAボランティア  
<http://www.jica.go.jp/volunteer/outline/history/> (2016年2月2日 検索時点)  
 JICAボランティアの事業概要 JICAボランティア  
<http://www.jica.go.jp/volunteer/outline/> (2016年2月2日 検索時点)  
 野球―要請情報概要 青年海外協力隊 (JV) JICAボランティア  
<http://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/index.php?m=List&clD=327&n=y> (2016年2月2日 検索時点)

#### 参考文献

- 1) ペルーを支援する会 (2004) 『グラスシアスペルー ―海を越えたキャッチボール―』ペルーを支援する会、11〜19頁、255頁
- 2) もろしのぶ (1999) 『青年海外協力隊になるには』ペリかん社、44〜56頁
- 3) 内海成治 (2012) 『はじめての国際協力』昭和堂、26〜33頁、318頁
- 4) 細谷広美 (2012) 『ペルーを知るための66章』第2版』明石書店、3〜5頁

#### 参考ウェブサイト

- 1) 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/> (2013年4月23日検索時点)
- 2) 青年海外協力隊・JICA <http://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/> (2013年4月23日検索時点)